

戸建て住宅における駐車空間の使いこなしに関する研究 その1  
：高岡市吉久における使いこなしと空間・居住者特性の実態

地方住宅地 生活景 生活領域  
あふれ出し カーポート 地域コミュニティ

準会員 ○田中 千晴\* 正会員 重山 隼人\*\*\*\*  
正会員 北島 陽貴\*\* 正会員 森 豪大\*\*\*\*  
正会員 藪谷 祐介\*\*\* 正会員 梶田 美結\*\*\*\*\*  
正会員 安倍 ひより\*\*\*\*

1. 研究の背景と目的

景観の観点から、既製品カーポートによる無機質な町並みが批判的に評価されている。その一方で、駐車空間で生じている多様な使いこなし<sup>注1)</sup>とそれに伴うあふれ出しが生活景<sup>注2)</sup>を生み出しており、そのような駐車空間を現代的な生活領域<sup>注3)</sup>という側面から再評価する価値がある。そこで、本研究では戸建住宅における駐車空間の使いこなしの実態と空間や居住者の特性との関係に着目し、使いこなしの特性とそのメカニズムを明らかにすることを目的とする。なお、本研究は2編で構成され、本編では使いこなしの実態と空間や居住者の特性を整理する。

2. 研究方法

2-1. 研究対象

研究対象として、富山県西部に位置する高岡市吉久(以下、吉久)を選定した(表1, 図1)。吉久は重要伝統的建造物群保存地区に選定された歴史ある町家形式の町並みを有している地域である。

2-2. 調査・分析方法

複数の調査を併用し、使いこなしの実態と空間や居住者の特性とのクロス分析によって、それらの関係を考察する(表2)。なお、駐車空間の空間特性は類型化し、居住者の駐車空間への評価意識は因子の抽出を行う。また、使いこなしを駐車以外の用途による用途転用と居住者が物理的に手を加える物的改変によって構成される現象であると定義する。なお、調査実施にあたりヤン・ゲールの屋外活動の分類<sup>3)</sup>や既往研究<sup>4)5)</sup>、事前調査を参照し、使いこなしの分類や調査項目を検討した(表2, 図2)。

3. 使いこなしの実態

図3より、用途転用(n=67)も物的改変(n=58)も全体の半数程度で生じている。用途転用の有無を比較すると、「用途転用あり」は「用途転用なし」に比べて「物的改変なし」の割合が41%pt小さいため、用途転用に伴って改変が生じていると推察される。また、「用途転用あり」と用途転用の各分類を比較すると、「交流内包」は「用途転用あり」に比べて改変なしの割合が11%pt大きいため、物的改変が生じにくいと推察され、交流内包は何も設置されていない駐車空間で生じやすいと考えられる。「趣味・家事」は「用途転用あり」に比べて「製作内包」の割合が18%pt大きいため、

表1 研究対象の選定理由

①自動車による移動が定着している地方住宅地であること。
②モータリゼーションを跨ぐ複数の構成年代を有すること(図1)。
③朝市やアートイベントなどの地域行事で駐車空間が活用されていること。
④公共交通機関である路面電車の停留場があること(自動車を手放し易いと推察)。

表2 調査概要

調査	アンケート調査	観察調査	ヒアリング調査
期間	2023年6月	2023年7月	2023年9月
方法	訪問・ポストインで配布、訪問で回収	接続道路に対して開放的な駐車空間を観察	訪問して半構造化インタビュー形式で聞き取り
項目 <sup>*1</sup>	【使いこなし】用途転用・物的改変の種類 【空間】構成年代/重伝建範囲/接道方位・幅員/外構要素/駐車可能台数/駐車台数/平面構成/動線・視線接続/屋根/媒介要素 【属性】年齢/居住年数/転居/働き方/休日の外出頻度/家族人数/家族構成(世帯)/家族構成(子供・高齢者) 【意識】愛着/周辺環境/空間環境/内外接続/清潔感/デザイン/趣向/景観		
対象	吉久の全住戸(394件)		4つの用途転用ごとに1件
分析	回収数:173件(43.9%),分析数:124件(31.5%) <sup>*2</sup>		4件

※1 観察調査では、快適化転用の種類のみ調査。ヒアリング調査は補足的な位置づけとし、ライフステージによる使いこなしの変化や理由を調査。

※2 観察調査・アンケート調査の両方のデータが揃っている標本。

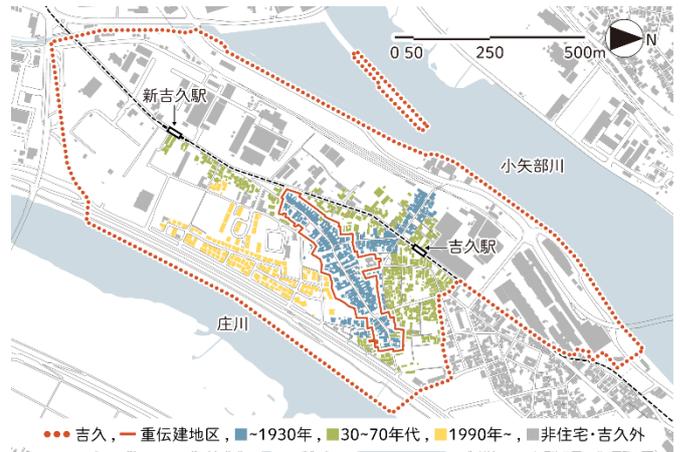


図1 吉久の範囲と構成年代

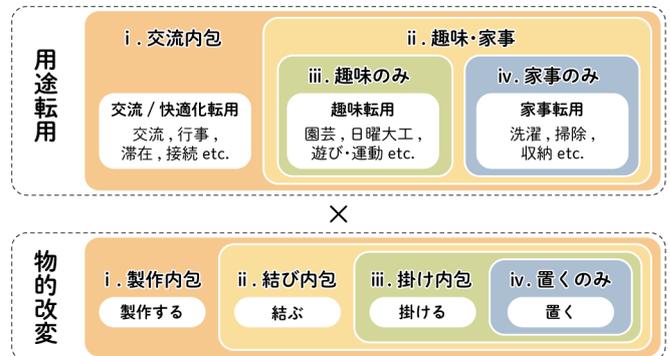


図2 使いこなしの分類

趣味・家事では製作内包が生じやすいと推察される。

#### 4. 駐車空間の空間特性とその類型化

駐車空間の類型化を行うために主成分分析(プロマックス回転)を行った結果、5つの特性軸が得られた(表3)。続いて、特性軸の主成分得点を基に階層的クラスター分析(ウォード法)を行った結果、類型1【非媒介・歴史型】、類型2【接続・非歴史・狭隘型】、類型3【分断・狭隘型】、類型4【媒介・広大型】の4つに類型化できた(図4, 5)。

#### 5. 居住者の駐車空間への評価意識の因子抽出

駐車空間への評価意識の因子を抽出するために探索的因子分析(最尤法・オブリン回転)を行った結果、第1因子【自己親和性】、第2因子【交流性】、第3因子【環境性】、第4因子【景観性】という4因子が得られた(表4)。なお、第1因子は自分らしさによる愛着、第2因子は人との繋がりによる愛着に関する項目で主に構成されている。

#### 6. まとめ

本稿では、使いこなしの実態と空間や居住者の特性を整理すると共に、物的改変が用途転用に伴って生じることを明らかにした。次稿では本稿の結果に基づき、使いこなしの実態と空間や居住者の特性の関係を考察する。

#### 注

- 注1) 2-2で定義と分類を記載している。
- 注2) 後藤ら1)によると、生活景とは、生活の営みが色濃くにじみ出た景観である。
- 注3) 小林2)によると、生活領域は「ある個人なり集団が、自分あるいは自分たちのものという意識を持ち、そこを支配するところの一定の空間である」と定義されている。人は地域社会の中の生活領域に範囲を置き、生活する場所(地域社会も含む)と自分たちの領域(生活領域)を認識的に分けている。

#### 参考文献

- 1) 後藤春彦ほか著(日本建築学会編):生活景, 学芸出版社, 2009
- 2) 小林秀樹:集住のなわばり学, 彰国社, 1992
- 3) ヤン・ゲール 著, 北原理雄 訳:建物の間のアクティビティ, 鹿島出版会, 2011
- 4) 田口陽子, 川上正倫, 服部拓庸, 是永美樹, 八木幸二:住宅団地パイルママーアにおける住棟立面と屋外領域の相互関係:第2次世界大戦後に開発されたオランダ住宅団地の再生に関する研究 その2, 日本建築学会計画系論文集, 第71巻, 第606号, pp.33-39, 2006
- 5) 三輪康一, 安田丑作, 末包伸吾, 栗山尚子:住宅地の前面道路の生活領域化と露地性の継承に関する研究:阪神大震災復興住宅地における路地空間の変容分析を通じて, 住宅総合研究財団研究論文集, 第35巻, pp.37-48, 2009

表3 駐車空間の特性軸

軸特性	第1軸 媒介性	第2軸 狭小性	第3軸 閉鎖性	第4軸 接続性	第5軸 歴史性
項目(37)					
屋根:なし	-0.863	-0.002	-0.240	0.057	-0.002
空間要素(梁):あり	0.850	0.070	0.008	-0.018	-0.041
空間要素(柱):あり	0.830	0.085	0.008	0.086	-0.024
空間要素(貫):あり	0.676	0.207	0.038	0.034	-0.079
屋根:一部	0.643	0.082	-0.442	0.101	-0.119
道幅:1台分	0.178	0.932	-0.075	-0.017	-0.057
道幅:2台分	-0.178	-0.932	0.075	0.017	0.057
構成年代:1990年~	0.324	-0.597	-0.110	0.055	-0.319
規模:3台分	0.051	-0.504	0.096	0.107	-0.174
屋根:全体	0.212	-0.092	0.775	-0.180	0.134
平面構成:組込み	0.160	-0.035	0.632	0.068	-0.008
余白:2台分~	0.050	0.023	-0.588	-0.161	0.009
余白:なし	0.049	0.105	0.550	-0.026	-0.344
規模:4台~	0.171	0.033	-0.499	-0.174	0.152
動線接続:部屋のみ	0.229	0.054	0.396	-0.181	0.106
平面構成:複合	0.191	0.081	-0.391	-0.342	-0.200
動線接続:玄関のみ	-0.056	-0.010	-0.020	0.716	-0.106
動線接続:なし	-0.260	0.002	-0.184	-0.706	-0.225
平面構成:隣接	-0.246	-0.042	-0.189	0.596	0.087
視線接続:なし	-0.090	0.070	-0.042	-0.590	0.098
平面構成:独立	-0.075	-0.006	0.080	-0.514	0.152
視線接続:玄関,部屋	0.056	0.094	-0.224	0.418	0.233
構成年代:~1930年	-0.085	0.318	0.074	-0.031	0.830
重伝建範囲:内部	-0.322	-0.147	0.075	-0.050	0.719
構成年代:30~70年代	-0.254	0.291	0.037	-0.025	-0.562
動線接続:玄関,部屋	0.248	-0.047	-0.112	0.168	0.407
余白:1台分	-0.096	-0.132	-0.075	0.168	0.359
寄与率	0.116	0.091	0.073	0.070	0.061
累積寄与率	0.116	0.207	0.280	0.350	0.411

[note] 紙面の都合上、因子負荷量の低い項目は表記していない。

表4 評価意識を構成する4因子とその因子負荷量

番号	項目	第1因子 自己親和性	第2因子 交流性	第3因子 環境性	第4因子 景観性
①	駐車場は自分のセンスに合っている。	0.883	-0.051	0.067	-0.014
②	駐車場で自分らしくいられる。	0.768	0.214	0.024	-0.054
⑩	自分好みにレイアウトされている・飾られている。	0.697	-0.004	-0.031	0.299
⑪	デザインが優れている。	0.658	-0.042	0.005	0.333
⑫	日射・雨風を十分しのぐことができる。	0.447	-0.084	-0.118	0.003
⑬	駐車場から自然が感じられる。	0.402	0.174	0.237	-0.113
⑮	友人・知人との関係があり重要な場所だ。	-0.001	0.911	0.024	0.099
⑯	家族との関係があり重要な場所だ。	-0.047	0.787	0.002	0.087
⑳	他の部屋や庭より駐車場に居ることが好き。	0.330	0.489	0.004	-0.249
㉑	他の部屋や庭よりもやりたいことができる。	0.424	0.435	0.056	-0.118
㉒	十分な明るさがある・日当たりが良い。	-0.006	-0.004	0.968	-0.008
㉓	十分な風通しがある・風通しが良い。	-0.013	-0.015	0.831	0.045
㉔	町並みの魅力を高める駐車場だ。	0.051	0.152	0.035	0.849
㉕	通行人・来訪者に見せたい駐車場だ。	0.139	0.010	0.128	0.692
因子寄与		3.387	2.270	1.829	1.714
因子寄与率 (%)		24.2	16.2	13.1	12.2
累積寄与率 (%)		24.2	40.4	53.5	65.7

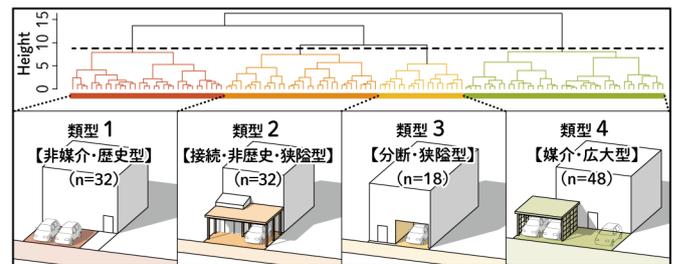


図4 クラスター分析のデンドログラムと4つの空間類型

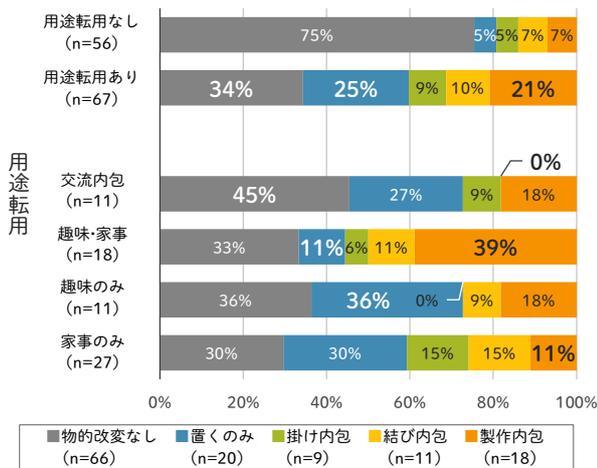


図3 用途転用と物的改変の関係

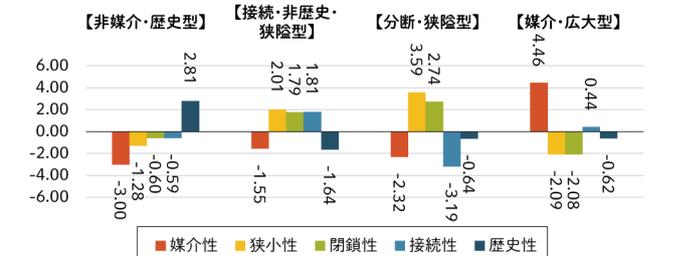


図5 4つの空間類型の主成分得点の平均値

- \* 富山大学芸術文化学部 学部生
- \*\* 五井建築研究所
- \*\*\* 富山大学学術研究部芸術文化学系 講師
- \*\*\*\* 富山大学人文社会芸術総合研究科 大学院生
- \*\*\*\*\* バウハウス丸栄
- \* Undergraduate, School of Art and Design, Univ. of Toyama
- \*\* GOI Architecture & Associates.
- \*\*\* Lecturer, Faculty of Art and Design, Univ. of Toyama
- \*\*\*\* Graduate of Humanities, Arts, and Social Sciences, Univ. of Toyama
- \*\*\*\*\* Bauhaus Maruei